ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　遠くから聞こえてきた音の音源は、二人が思っていたよりも近かった。

「てめぇら、何してやがるっ！」

　鳥ポケモン達の住処になりそうな高い木が何本も立ち並んでいる中、太一が怒鳴り声が轟いた。その迫力は、同じように怒鳴りかけた雅也が口を開いたままフリーズした程である。

　だが、そんな雅也の目に飛び込んできたのは、川の向こうで倒れているキリンリキだった。ここら辺じゃ、滅多に見ることが出来ない。名前の通り、キリンのようなポケモンだが、しっぽに、黒くて小さい頭が付いているのが特長だ。今は、どっちの頭も目を閉じ、ぐったりとしている。後ろ足のあたりを中心に広がっている血の池が、フリーズした雅也の口を突き動かした。

「おじさん達、何してるの？」

　雅也のその声に、迷彩服を着た三人の男性は、ポカンと口を開けているだけで、何も答えなかった。その中で、最も背の低い男性は、手にライフルを持っているので、キリンリキを撃ったのは間違いなくこいつらである。まさか、こんな小さな子供に見られるとは思っていなかったのだろう。それでも、暫く雅也と太一が睨んでいると、一番背の高い、ノッポの男性の開いた口がようやく動いた。

「おい、どうする……？　見られちまったぞ？」

「……まだガキだ。力づくで逃げれる」

　続いて喋ったのは、ライフルを持っていない男性だ。見下すような目で、二人を見る。

　だが、その言葉に、太一のこめかみがピクっと動いた。

「……あぁん？　てめぇ、舐めたこと言ってんじゃねーぞ。この星川太一様から逃げられると思ってんのかっ？」

　すると、ライフルを持った奴が、太一の発言に素早くライフルの銃口を向ける。指は、引き金に触れていた。

「……おいおい！　殺す気か？」

「仕方ねーだろ？　見られちまった以上、口を封じるに越したことはねえ。どうせポケモンの密猟も殺人も、罪は対して変わらん」

　ノッポの男性が慌てたように言った言葉に、ライフルの男は舌打ちをして、そう呟く。

　だが、その口調には、どこか「銃を向ければビビって逃げ出すだろう」というニュアンスがあって、それが二人の怒りをさらに激しくする。

「撃ちたきゃ、撃てよ」

　吐き捨てるように言った太一に、三人の男性はそろって目を見開く。一瞬、体が固まったその隙を逃さず、雅也はボールを下に落とした。

「てめっ――」

「蔓の鞭！」

　中から出てきたフシギダネの蔓が、構えていたライフルを上空へ吹っ飛ばす。そして絶句して空を見上げた三人の隙を、今度は太一が見逃さない。右手の人差し指を、ライフルを持っていた男性に向けた。

　その瞬間、川から一匹のポケモンが飛び出て、その姿を現す。蛇のような姿の、全身が青いドラゴンタイプのポケモン、ミニリュウだ。普段はつぶらな瞳が、今は太一のように鋭く尖って、男達を見据えていた。

「破壊光線！」

　そう怒鳴った太一の声が聞こえた時、ミニリュウの額にある白い突起が白く光る。その刹那、一本の金色のエネルギー波が、ライフルを持っていた男目掛けて放たれた。そのエネルギー波は、男の心臓のすぐ上あたりに直撃する。

「――！」

　声を上げるために開かれた口からは何も出ず、仰向けに吹っ飛んだ男は白目を向いていた。焼け焦げたような匂いがあたりを漂う中、恐る恐る、雅也は太一の、どこか嬉しそうに口角の上がった顔を見る。

「大丈夫だ」

　それに気がついたのか、太一が呟いた。

「ちゃんと手加減はしたっつーの。死んじゃいねーよ。多分な」

「た……多分？」

　思わずそう聞き返した雅也だったが、慌てて首を振る。どうやら、聞かなかったことにしたらしい。

　一旦、深呼吸をした雅也は、改めて、残りの二人の男性を見た。彼等は、今は倒れた男性に駆け寄っている。脈を測って、その後ホッと息を吐いた所を見ると、どうやら太一の言った通り、死んではいないようだ。

「おい、雅也」

　つられてホッとした雅也に、太一が耳打ちをしてくる。だが、目は敵に釘付けになっていた。

「こっから見た限りじゃ、キリンリキはまだ息がある。すぐ手当をすれば、救急車が来るまでは何とか持つはずだ」

「分かった」

　太一の声に合わせ、雅也も声を落とす。

「つまり、そっこうであいつらを倒して――」

「なにコソコソしてんだ！」

　ノッポの男性の怒鳴り声が響く。もう一人も、鼻息荒く、雅也達を睨んでいた。

「……そっこうであいつらを倒して、キリンリキの手当をするって訳だね」

　だが、雅也はそんな二人を気にすることもなく、そして普通の声のトーンでそう言い放った。太一が、不敵な笑顔で頷く。

「本当は俺一人でも、あいつなんざ倒せっけどな。サービスで一人くれてやる。そっちの邪魔しねーように、遠くに行ってやらぁ」

「御親切にどーも。まぁ、僕もあの人達相手なら一人でも勝てるけどね。あっ、遠くに行くなら、心配だしリオル貸そうか？」

　そう言って、雅也はリオルをボールから出す。それを見て、太一はプッと吹き出した。

「な……舐めてんのかガキども……！」

　そんな、挑発的な二人のやりとりを見て、怒り狂ったノッポの男の顔は真っ赤になっていた。もう一人も、目を怒りに燃やしている。まぁ、当然といえば当然だ。

「そんじゃ、ありがたくリオルは貸りるわ。背の高い奴は俺が潰すから、雅也はもう一人の方を頼む」

「オッケー」

「ふざけんな！　二人まとめて殺してやる！　コドラ！」

　無視して会話を続けた雅也達に、ついにノッポの男性はキレる。腰についたハイパーボールを投げると、全身、鉄の鎧を纏った四足歩行のポケモンが出てくる。

「サイドン！」

　続いて、もう一人もボールを投げた。出てきたのは、二足歩行の巨大なサイである。

「戻れ、フシギダネ。ピチュー、ゴー！」

　雅也も、フシギダネの代わりにピチューを出す。一瞬何か言いそうになった太一だが、咳払いを一つして、自分の相手を睨んだ。彼はこのまま、ミニリュウで戦うつもりらしい。

　呼吸と、川のせせらぎの音が聞こえる中、四人の声が同時に響いた。

「！」